

# 今昔ばなし抱合兵団

——金博士シリーズ・4——

海野十三

青空文庫



なにがさて、例の金博士きんはかせの存在は、現代に於ける最大奇蹟だ。

博士に頼みこむと、どんなむつかしそうに見える科学でも技術

でも、解決しないものは一つもない。雲を呼んでくれと博士にい

えば、博士はそこに並んでいる塚びんの栓せんを片端かたはしから抜く。抜けば、

塚の中よりは、濛もうもう々たる怪しき白い霧、赤い霧、青い霧、その

ほかいろいろが、竜卷たつまきのような形であらわれ、ゆらゆらと揺れ

ているのを面白がっている間に、いつしか部屋の中は一面の霧の

海と化<sup>か</sup>してしまつて、そのうちに博士がどこにいるやら、実験台がどこにあるやら、はては自分の墓<sup>がまぐち</sup>口がどこにあるやら、皆<sup>か</sup>目<sup>く</sup>分<sup>く</sup>らなくなつてしまふというようなわけで、結局金博士の智慧を験<sup>た</sup>めそうとした奴の墓口の中身が空虚<sup>から</sup>と相成<sup>あいな</sup>つて、思いもかけぬ深<sup>しんこく</sup>刻<sup>こく</sup>な負けに終るのが不動の慣例だつた。

「おいおい、ちよつとしずかになつたと思つたら、ひどいことを書きおる。わしは瓦斯<sup>ガス</sup>の研究をやっているから、赤い霧、青い霧の話はいいとして、墓口がどうかしたというくだりは、どうも人聞きが悪いじゃないか。わしの人格にかかわる」

いつの間にか、私の背後<sup>うしろ</sup>から金博士が、原稿用紙をのぞきこんでいたのを、私は知らなかつた。

そこで私は、ペンを休ませないで、こういったものである。

「金博士、私があれば教えてくださいと懇願こんがんしていることに博士が応こたえてくださらない限り、私は博士の有ること無いことを書きなぐつて、パンの料しろにかえながらいつまでもこの上シャンハイ海に頑張がんばっている決心ですぞ」

そういつて私は、前の卓テーブル子かじに嚙かじりつく真似まねをしてみせた。

すると博士は、人並ひとなみはずれた大頭おおあたまを左右にふりながら、

「はてさて困った男だ。まるで蔣しょう介石かいせきみたいな攻勢こうせい的てきどうじ同情ようじょうを求めるわい。しかしいつまでもわしの部屋に頑張がんばられても困るが、一体貴公ききこうの教きょうわりたいたいという事項は、何じやつたね」

「あれえ、金博士はもうそれをお忘れになつたんですか。そんな

ことじや困りますね」

と、私は大袈裟おおげさに呆あきれてみせて、ひとのいい博士の、急所ひにとやりつっことやりつっこりつっこ  
槍突やりつっこ込んだ。

「ああそれは済まんじやった。はてそれは何のことだったか、あ  
あそうか、殺人光線のエネルギー半減はんげんきより距離のことだったかね」

「いえ違いますよ。博士、私が教えてくださいといったのは、そ  
んなむつかしい数学のことではありません。つまり、文化生活線  
上に於けるわれわれ人間は、究きゆうきよく極きよくなる未来に於て、如何いかなる  
生せい活かつ様よう態たいをとるであろうか？ その答を伺うかがいたいと申したの  
です」

「なんじや、もう一度いつてくれ。何の呪じゆもん文もんだか、さつぱりわ

しには通じない」

「何度でも申しますが、つまり、文化生活線上に於けるわれわれ人間は、究極なる未来に於て、如何なる生活様態をとるものであろうか？ どうです。今度は分りましたろう」

「何なんべん遍聞いても、分りそうもないわい。結けつ着ちやくのところ、や

がて人類はどんな風な暮し方をするかということなのじやろう」

「そうですねあ。まず簡かん単たん粗そ雑ざつにいうと、そういうところですねえ」

「そうか、そんな質問なら、答はわけのないことじや。ピポスコラ族と全まったく同じようになる。そして一万年か二万年たてば、われわれ人類にはネオピポスコラ族という名前がつくだらうな」

「ははあ。そのピポスコラ族というのは、何ですか。どこにいる民族ですか」

「それは、今わしがいつても、お前はとても信じないと思うから、いうのはよそう」

「博士、それは卑怯ひきようというものです。今までに民族学や人類学

はずいぶん勉強しましたが、ピポスコラ族なんてものは聞いたことがありません。博士は出鱈目でたらめをいっていられるのでしよう」

「莫迦ぼかなことをいっちやいかん。尤ももつと、パルプで慥こしらえたあのやす

い本なんかには出とりやせんだろうが、わしは嘘をいつているのではない」

「じゃ説明してください。或いは、私をそのピポスコラ族の前へ

連れて行ってくださってもかまいません」

「あはははは。うわはははは」

博士は、なぜか大声をたてて、からからと笑いだして、しばらくは笑いが停とまらなかつた。そのうちによく笑いを停めると、こんどは笑いあきたか、急に熊くまの胆きもを嘗なめたようなむつかしい顔になって、

「では、こうしよう。来る八月八日を第一回目として、それから十年毎ごとの八月八日に、お前はその日の日記したたを認めて、わしのところへ送こつてきなさい」

「十年毎の間隔かんかくは、ちと永いですね」

「そうでもないよ。そうしてお前が、第八回目的の手紙を書くよう

になったときには、お前は否<sup>いやおう</sup>応なしに、ピポスコラ族に出会<sup>であ</sup>つた話を書かなければならないだろう。それまでわしは、ピポスコラ族のことも、又それと同じ生活様態になるわれわれ人類のことについても、喋<sup>しゃべ</sup>らないことにする」

「まるでお伽<sup>とぎばなし</sup>噺<sup>ばなし</sup>に出てくる人間の姿をした神様の台辞<sup>せりふ</sup>みたいですね。そんなまどろこしいことをいわないで、早く教えてください、一体われわれが遠き未来において、どんな生活をするかを……」

「云わないといったが最後、この金博士は絶対に云わないのじや。この上ぐずぐず云うと、この部屋に赤い霧、青い霧をまきちらすぞ」

「いや、それはお許しねがいたい」

私は、墓口を片手でおさえると、脱兎だつとのように、博士の研究室を逃げだしたのであった。

——以上が、金博士に送った第一回の日記、つまりその年の八月八日の私の日記だったのである。

## 2

第二回目の日記は、それから十年たった十×年八月八日に於け

る私の日記であつた。これは第一回分のものとは違つて、大分日記風になつてきた。以下、これを再録しておく。

十×年八月八日 晴れ

小便に起きたついでに、明り取りの窓から暁の空を透かしてみると、憎らしいほど霽れ渡つた悪天候である。

これでは今日も、日本空軍のはげしい爆撃があるだろうと思つて憂鬱ゆううつになつたとたん、ぷーつという空襲警報くうしゅうけいほうのサイレンであつた。

「うわーっ、つまらない予想が当りやがる」

私は、ぺつと唾をはくと、寢床へとつて返した。ベッドの上の衣服と、その脇わきに吊つるしておいた非常袋を掴つかむが早いか、部屋をと

びだして、街路を駈<sup>か</sup>けだした。目標の市民防空壕<sup>しみんぼうくうごう</sup>は、五百ヤードの先である。

息せき切つて防空壕<sup>たど</sup>に辿りついたはいいが、ふと手を頸<sup>くび</sup>のところへやってみると、肝腎<sup>かんじん</sup>の入壕<sup>にゆうごうしよう</sup>証がない。しまった。紐<sup>ひも</sup>をつけて頸<sup>くび</sup>にかけていたが、途中で切れてしまったらしい。といつて引返<sup>ひっかえ</sup>してまごまご探していようものなら、足の早い日本空軍の爆撃機は、私の知らぬうちに頭上へ現れるだろう。

私は泣き面<sup>つら</sup>に蜂<sup>はち</sup>の体<sup>てい</sup>たらくであつた。

「入れてくださいよ。入壕証は、その辺で落として来たんですよ」「その辺で落として来たんなら、これからいつて拾ってくるがいじやないか」

「それが……」

役人は意地悪い顔つきで、私を睨にらみつけている。仕しやう様がない。なけなしの財布の底をはたくより外ほかに途がない。

私は、非常袋の中へ手を入れて、五千元げんの法幣ほうへいを掴つかみだした。それをそつと、役人に握にぎらせると、

「今日だけ、一つ頼みます」

「ううん。たった、これだけか。これだけでは……」

「ああ出します。もうこれで身代しんだいかぎ限りなんです」

と、私は更に三千元の法幣を掴みだして、かの役人の手に握にぎらせた。

「よろしい。今度だけ大目に見る。この次は二万元以下じゃ、見

のがされんぞ」

「へい」

私は急いで、役人の腕の下をくぐって、防空壕の中にとびこんだ。すると、ずんずんずんずんと、大きな地響が聞えてきた。もう爆撃が始まったのである。ぐずぐずしていると、防空壕の入口が閉つてしまふところであつた。

それが爆撃の皮切りであつた。それから、始まつて、息をつぐ間もなく、爆裂音ばくれつおんが続いた。壕の天井や壁から、ばらばらと土が落ちて、戦おののひしめき犇ひしめきあう避難民衆の頭の上に降つた。あつちからもこつちからも、黄色い悲鳴があがる。

中には、案外くそ落着きに落着いている奴もあるもんだと思つ

だが、私と肩を摺り合わせている青年がいった。

「あの、どどーんという爆裂音と、あのずしんずしんという地響と、この二つを無くすることが出来ないものかな。あれを聞くと、いのち生命がちぢ縮まる」

「それは無理だと思うね。この重慶じゅうけいにいる限り、どうも仕様が  
がないよ」

と私はいった。

「いや、私はまだ対策があると思うんだ。もつと防空壕を深く掘るとか、出入口の扉をドア三重四重にするとか、政府が努力するつもりなら、もつといい防空壕が出来る筈だ。そう思いませんか」

「それはそうだね」と私は青年にさからわぬよう相槌あいづちをうった。

「とにかくわれわれは、世界中で最も勝れた<sup>すぐ</sup>市民だということを忘れてはいかん」

青年の話が急にかわった。

「え、どうして？」

「え、だってそうだろうが。世界中で、われわれほど毎日のように猛爆をうけている市民はいない。従って、われわれほど、すぐれた防空施設を持ち、且つ<sup>か</sup>防空精神力を持った人間はどこにもいないというわけだ。つまり我々は、日本空軍のおかげで、世界一の防空文化人なんだ。そうでしょうが」

「あ、なるほど、なるほど。しかし、ずいぶん長期戦が続くものですね。もういい加減、日本空軍が鉄に困って木<sup>もく</sup>製<sup>せい</sup>や泥<sup>どろ</sup>製<sup>せい</sup>ですなあ。」

の爆弾を落としてもいい頃だと思うんだが、相変らず鉄の爆弾を落としとるですが、敵もさるものすなあ」

「いや。もう今日の爆撃あたりには、木製の爆弾を使っているのかもしれないよ」

「でも、木製爆弾なら、あんなたくま遅しい音はしないでしよう」

「そうだね。今日の爆弾は音が、悪い……」

といっているとき、大きな音響と共に、目の前が火の海になったかと思ったら、私はそのまま気を失ってしまった。……

今日の日記はこれでおしまいである。なぜなれば、私が気がついたのは、そのよくあき翌朝のことであつたから、今日の日記としては、気を失ってしまった点々々というところで終りなのである。

金博士へ送る第三回目の日記。

前の日記から、また十年たったのである。

二十×年八月八日 晴れ

ラジオは、今朝は空が晴れているとアナウンスした。十年前のころは、夜が明けて、空が晴れていると、空襲があるという予想から、晴<sup>せい</sup>天<sup>てん</sup>を恨<sup>うら</sup>んだものである。この頃は、晴れていようが、

曇つていようが、どっちでも大した差違さはない。どんな日でも、飛行機はとんで来て、正確に爆撃をしていくのだから。

しかしこの頃のように、われわれ市民は、地下へ潜もぐつたきりで、一ヶ月に一度も、地上へ出て空を仰あおぐ機会が与えられていないと、なんだか天気のことなど、莫迦ばかくさくて、聞く気になれない。

食事をすませて、第三区行きの地下軌道にのり、会社に出勤した。今朝は、いきなり委員会議だ。

今日の議題は、地下都市の拡張工事について、掘り出した土を、どこの地上に押し出すかということである。うっかりどこにでも出そうものなら、たちまち敵国の空中スパイに発見されて、こつちの新しい地下都市の所在しよざいを突き留とめられてしまう。

午後三時であつたが、会議中、空襲警報が、睡むそうに鳴り響いた。

「またアメリカ空軍が爆撃にやってきたか。御苦労なことじゃ」  
この頃の爆撃はラジオのアナウンスだけで、お仕舞しまいだから、頼たよりない。地下都市の構築法こうちくほうが完全になつて、爆弾が落ちてても、地響一つ聞えて来ないし、もちろん爆裂音なんか、全く耳にしようと思つても入らない。なにしろ地下都市も、今は百メートルの深さにあるのだから、安心したものである。

そんなことを思つていたとき、だしぬけにもものすごい音響が聞え、同時に、壁がぴりぴりと震えふる、天井に長々と罅ひびが入つた。

「うわーっ、めずらしいじゃないか、爆裂音だ。どうしてこんな

地下まで、紛れ<sup>まぎ</sup>こんできたのかね」

議長さえ、まだそれほどの険悪<sup>けんあく</sup>な事態の中にあるとは考えないで、爆裂音を身近くに聞いたことを興<sup>きよう</sup>がっている。

だが、時間がたつに従って、一座は、今日の爆撃がたまたま地<sup>ち</sup>隙<sup>げき</sup>を縫って、深い地下に達したというような紛れ<sup>まぐ</sup>あたりのものではないことに気がついたのだった。爆裂音は、次第に大きさを増し、そしてピツチを詰めてきた。

議長が、議案をそっちのけにして、びりびり震動する周囲の壁を見廻した。

「どうも今日の爆撃は変だね。いやに地底ふかく浸透<sup>しんとう</sup>するじゃないか。おい君、対空本部へ電話をかけて事情を聞いてみよ」

議長は私に命令した。

私は早速、対空本部附の漢師長を呼びだした。そして、い  
つにも似合わしからぬ爆弾の深度爆裂についてたずねたのであ  
る。

すると漢師長は、あたりを憚るような口調になって、私に云  
つたことに、

「それは、いつもと違っている筈だ。今日アメリカ軍が使ってい  
る爆弾は液体爆弾なんだ」

「液体爆弾？ そんなものは初めて聞いたが、それは一体どんな  
ものかね」

「つまり、アメリカが深い地下街爆撃用にと新たに作った爆弾で、

A種弾とB種弾と二つに分れているんだ。まず初めにA種弾をど  
んどん墜おとすのさ。すると爆弾は土どちゆう中で爆発すると、中からA  
液が出て来て、それが地隙や土壌どじようの隙間すきまや通路などを通つて、  
どんどん地中深く浸透してくるのさ。ちようど砂地すなじに大雨が降る  
と、たちまち水が地中深く滲しみこんでいくようなものさ」

「なるほど。そして、そのA液は滲み込むと、爆発するのかね」

「いいや、A液だけでは、爆発はしないのだ。暫しばらく時間を置いて、

丁度ちようどA液がうまく浸みこんだ頃ころあい合を見はからつて、こんどは

B液の入ったB種弾が投下されるのだ。このB液も、さっきのA  
液と同様に、地下深く浸みこんでいくが、どこかで先に滲みこん  
でいるA液と出会うと、そこでたちまち、猛烈な化学反応が起つ

て大爆裂をするというわけだ。おそろしい発明だよ、液体爆弾というやつは」

「ふーん、考えたもんだね。すると、われわれも今までのように、地下百メートルのところにあるからといって安心していられないわけだな」

「そうだよ。おお、君の今いる地区へも、既にA液弾が落ちて、今ずんずん地底へ向けて滲みこんでいるという報告が来ている。この上、B液弾が落ちれば、たいへんなことになるよ。大いに注意しなければいけない」

「大いに注意しろといって、どうするのかね」

「それはね、水はけ——ではない液えきはけをよくすることだ。上か

ら滲みこんで来た液は、樋といとか下水管げすいかんのようなものに受けて、  
どンドン流してしまうことだ。しかしA液とB液とを一緒に流し  
ては、さつき云ったとおりに爆発が起るから、その前に、濾過器ろかき  
を据すえつけて、A液とB液とを濾こし分け、別々の排流管はいりゆうかんに流  
しこまなければいけない」

「それはずいぶん面倒なことだね。急場きゆうばの間に合わないや」

「でも、それをやって置かないと、君たちの生命いのちに係かかわ

「生命に係るのは分っているが、もうA液は天井のあたりまで滲  
みこんでいるのに、樋工事を始めたり、濾過器を取寄せたりする  
わけにいかんじゃないか」

「それもそうだな。じゃあ、仕方がない。ここから君たちの冥めいふ

福を祈っているよ。南無阿弥陀仏！」

「おい、そんな薄情なことをいうな。おーい、何とか助けて

くれ。あ、電話を切つちやいかん。……」

といっているとき、大音響と大閃光とに着飾って好まし

からぬ客がわれわれの頭の上からとび込んできたのであった。そ

れ以来、私は人事不省となり、全身とところきらわず火傷を負った

まま、翌朝まで昏々と死生の間を彷徨していたのである。

それからまた十年たった。

今日は八月八日である。金博士へ対して、約束のとおり、第四回目の日記を送ることになった。次に示すのは、その日記のうっしである。

三十×年八月八日 室内温度、湿度、照明度すべて異状なし  
配給も正確なり

本日は、地下千メートルを征服し、現在われわれの棲<sup>す</sup>んでいるこの極<sup>ごく</sup>楽<sup>らく</sup>地下街建設の満三ヶ年の記念日であるので、ラジオは朝から、じゃんじやんと楽しい音楽を送ってくる。

あれからもう三年たったか。

われわれ人類も、空爆の威力いりよくに圧おされて、だんだんと地底深く追いやられたが、初めはせいぜい地下二百五十メートルが人類の生活し得る限度で、それ以上になると、とても暑くて、生活は出来ないし、構築物こうちくぶつももたないといわれたものであるが、そうかといって、地下四五百メートルにまで達する深度爆弾しんどばくだんの餌食えじきになるのを待つていられないため、必死の耐熱建築の研究に国立研究所を動員し、遂ついにに不可能と思われたる難問題を解決し、三年前にこの輝かがやかしき極楽地下街の完成を見たわけである。

私は、食事を済ますと、すぐさまあつさくくうきぎどう圧搾空気軌道くだの管の中に入り、三分四十五秒ののちには、記念祝賀会場たるネオ極楽広場の人混みひとごの中に立っていた。

りようしゆせき  
梁首席の巨軀が、壇上だんじょうに現れた。

われわれは一せいに手をあげた。

「本日の記念日に際し、余は何よりも先まず第一に、敵国の空軍は本年に入つて、殆んど新しい飛行機の補充をなさなくなつたことを諸君の前に報告するの光榮を有ゆうするものである。いや、新機を補充しなくなつたばかりか、これまで敵国が保有していた軍用機も、最近一年は、壊こわれ放題にしてある始末しまつである。これ乃すなわち、わが国が、完全なる防空力を有する地殻ちかく及び防空硬天井ぼうくうこうてんじょうの下に、かくの如く地下千メートルの地層に堅固けんこなる地下街を建設したことによつて、敵国は空中よりの爆弾が一向効目いっこうききめがなくなつたことを確認し、そして遂に、その軍用機整備の縮小を決行する

に至った次第しだいであります。つまり、われわれが完全に地下もぐに潜ることによつて敵の空軍を全然無力化させることに成功したわけであつて、これにより、われわれの国家は、いよいよ安全にして健康なる発展を遂とげることが約束されたわけである。先さず盃かずきをあげて、今日の大勝利を祝つて、乾盃かんぱいしたいと思います。皆さん、盃を……」

私は、久ひさ振しぶりに、飲のみ慣なれない酒に酔よつてしまつて、それから以後のことを、よく覚おぼえていない。

それからまた十年たった。

第五回目の日記である。

四十×年八月八日

目が覚めると、今日は何をして退屈を凌しのごうかなと、それがま  
ず気にかかる。

極楽生活は、飲食にも困らないし、着るものも充分だし、外がいて  
敵きの侵入の心配もなし、すべて充分だらけであるが、只一つ困  
ったことには、来る日来る日の退屈をどうして凌ぐか、これに悩  
まされる。

ところが今朝は如何なる吉日きちじつか、私は不図ふと四十年前に、金博士から聞いた疑問の民族の名を思い出したのであった。

ピポスコラ族！

ピポスコラ族とは、どんな民族なのであろうか。あのときは空襲下おののに戦っていたときであつたから、それがどんな族だか調べてみる余裕がなかつた。よろしい、今日はあれを一つ古代図書館へいつて調べてみよう。私は、俄にわかに元氣づいた。

古代図書館に於て、完全に深夜まで暮した。しかしピポスコラ族が何ものであるかは、遂に手懸てがかりがなかつた。私は更にそのまま、次の日曆にちれきの領域に入つても、調べを続けることにした。しかしそれは最早もはや八月八日分の日記ではなくなるから、ここで攔かくひ

筆  
す  
る。

## 6

それからまた十年たった。五十×年八月八日となった。この日の日記は、従来の慣例を破って、遂に金博士の許もとへ届けられなかった。そのわけは、政府が突然、全国的に、通信杜絶つうしんとぜつを号令したからである。

その理由は？

その理由は、そのときには何のことだか、全く分らなかつたが、それから一年半ほどたつて、漸くぼんやりしたその輪郭だけがわかつた。それは白人帝国が、ひそかに抱合兵団をもつて、わが国攻略を狙っているという情報が入つたため非常警戒となり、遂に通信嚴禁となつた由である。

しからば、その抱合兵団とは、どんなものであるか。それが分つていれば、政府もそれほど狼狽する必要はなかつたのである。分らなかつたから、騒ぎが大きくなつたのであつた。その抱合兵団のことは、次の日記において、初めて全貌が明瞭となるであらう。

## 7

六十×年八月八日 最小限生活に追いこまれあり、食慾こと  
の外興奮して、治めるのに困難を感じず、非常時ゆえ、仕方  
なければ……。

前夜から、われわれは、リュックサックを肩に負い、必死で、  
縦井戸を登攀しつつあるのであるが、老人である私には、腕の  
力も腰の力も弱くて、一向はかがいかない。一時間もかかって、  
やっと五メートル登るのがせきのやまである。

しかも、気をゆるめていようものなら、下から上つて来た乱暴な市民のため、われは邪魔扱じやまあつかいにされて、まるで壁にへばりついているやもりを叩きおとすように、われ等の身体は奈落ならくへ投げおとされるのである。

奈落へ墜落ついろくすれば、どっち道、死あるのみである。岩かどに頭をぶつつけるか、そうでなくて死にもせず、元の極楽地下街まで墜ちおついたとすれば、そこには白人帝国軍の地底戦車隊ちていせんしゃたいが待っていて、たちまち身はお煎餅せんべいの如く伸のされてしまうのである。であるから、どっちにしても死の颯おとがを逃れることは出来ない。

ああ、今になってぶつぶついても仕方がないが、どうしてわが当局は、抱合兵団サンドイツチヘいだんの攻略に気がつかなかったのであろう

か。およそ攻撃目標たるわれわれが、敵軍の空中からの爆撃を避けて地下に潜り、空爆更に効果なしと分れば、敵軍はこんどは手をかえ、地中深くからわれわれの住居地を攻撃するであろうことは、素人にも分ることではないか。

何を今更、五万台にのぼる敵の地底戦車兵団をわれわれの足の下に迎え、あれよあれよと騒いで間に合うものか。

「市民たちは、即刻地上に避難せよ。地上に出た方が、まだ被害程度が軽いであろう」

そういつて、わが護衛司令官は布告をしたが、それもいい加減の対策だったことが、間もなく判明した。なぜといつて、何十年ぶりかで市民たちが地上へ頭を出したとたん、待っていましたと

ばかり、敵白人帝国の空中兵団は、われわれ同胞どうほうの上へ襲いかかったのである。猛爆、また猛爆、その惨状さんじょうは聞くにたえないものがあつた。

地底へ下りれば、敵の地底兵団あり、地上へ出れば、敵の空中兵団あり、上と下とからの抱サンドイッチ合兵団の攻撃にあつては、われわれは上のぼりも下くだりも出来ず、文字どおり進退しんたい谷きわまつてしまった次第である。

「ああしまった」

ああ痛い。とんだ愚痴ぐちをのべている間に、私は折角せつかく二日がか  
りで登った八メートルばかりの縦井戸を下すべに滑りおちてしまった。  
でも幸さいわいに、そこで地下道が水平に折れ曲つていたのでそれ以上

墜落しないですんだ。もう愚痴はよそう。そして私は、もう上るのも降りるのもよした。もうその氣力が無い。前途に対する希望は、ここでしずかに餓死がしするばかりである……。

と考えこんでいたとき、不意に私の肩を突つ付つく者があつた。私はびっくりして目を開いた。すると目の前に、逞たくましい顔の青年が、前まえ屈かみになつて、私の顔をのぞきこんでいた。

「おお、君は洪君こうくん」

「そうです、洪です。先生、ぐずぐずしていられますぞ。私と一緒に逃げてください」

「君の親切は感謝するが、もう迎むかも駄目だよ。上へ出ても下へ降りても殺されるものなら、ここでしずかにわが生涯を閉じたいの

だよ。わしをかまわんで呉くれ」

「先生、そんな気の弱いことでは、駄目じゃありませんか。敵の手に至いたらず、まだ逃げていくところが残っていますぞ」

「へえ、本当かね。それはどこだね」

「それはつまり、深く地底にも降りず、そうかといって地上にもとびださず、丁ちようど度その中間のところ、つまりサンドウィッチで

いえば、パンのところではなく、パンに挟まれたハムのところを狙って、どこまでも横に逃げていくのです。横へ逃げれば、まだ今のうちなら、無限にちかいほど、逃げていく場所があります。

そのうち、どこかで落ちついて、穴けつきよ居生活を始めるんですよ」

「しかしなあ洪君、横に逃げるといって、穴を掘っていかなけれ

ばならんじやないか」

「そうです。穴掘り機械がいりよう入用です。ここに私が持っているのが、人工ラジウム応用の長距離さくがんしゃ鑿岩車です。さあ、安心して、

この上におのりなさい」

「そうかね。それは実に大したもんだ」

と、私は鑿岩車に足をかけ、洪君のうしろの席へ腰を下ろした。そのとき丁度、私のリュックの中で、目ざましが午後十二時をうった。

それから十年のち、すなわち七十×年八月八日、私は日記を書く代りに、金博士に対して次のような手紙を書いたのだった。

炯眼なる金先生足下。まず何よりも、先生の御予言が遂に適中したことを御報告し、且つ驚嘆するものです。

金先生足下。ピポスコラ族には、遂に昨日面接しました。それは全く唐突のことでありました。

私は洪青年と、長距離鑿岩車にのつて、十年ほど前から、地中放浪の旅にのぼりましたが、昨日の昼頃、車を停めてしばし休憩をしていますと、ふしぎにも、地中のどこかで、どすんど

すんと地響がするではありませんか。私たちはおどろいて、顔の色をかえました。

私は、遂に敵の地底戦車にとり囲かこまれたのだと悲観しましたのに対し、洪青年は、こんなところに地底戦車隊がいるとは思えないと主張してゆずらず、その揚句あげく、遂に洪青年の意に従って、われわれは敢かんぜん然、鑿岩車を駆つて、怪音かいおんのする地点に向け、最後の突撃を試みました。

やがて、一段と大きく岩の崩くずれる音とともに、われわれは思いもかけない明るい部屋の中に突入したのです。私は愕おどろきの目をみはりました。そこは大きな洞窟どうくつで、猿とも人ともつかぬふしぎな動物が居合わせました。しかしその動物は別にわれわれに危害

を加える様子はありませんでした。

私の予かねて勉強しておいた 前ぜん世せい古こ代だい語ごが役にたつて嬉しいこ

とでした。彼等みづかは自ら、これがピポスコラ族であることを申立て

ました。彼等は二十万年前に、地中へ潜もぐつたと申して居りました。

その当時は、地上や空には恐きょう竜りゆうなどの恐ろしく大きな動物が

猛もう威いをふるい、地底深くには大土竜おおもぐら（それが退化して今日残つ

ているのが例のもぐらもちです）に攻めたてられ、遂じょうに上下谷げきわ

まつて横に向いて逃げるうち、このところに安全洞あんぜんどうを見出して、

穴けつきよ居動物となり果はてたことが分りました。

すべて、金先生の仰おっしゃ有あったとおりです。そこで私は洪君とは

かり、これから何とかしてこの土地でピポスコラ族にならない穴居

生活をつづけることになりました。もしもどこかで、洪君のため  
によき配はいぐう偶が見つかるならば、われわれ人類は、やがてネオピ  
ポスコラ族という新しい種しゅぞく族をつくり、この地中に、繁栄する  
ことでありましょう。

# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年8月

※底本は表題に、「こんじゃくばなしサンドイッチへいだん」と読みを付しています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力・tatsuki

校正：まや

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 今昔ばなし抱合兵団

——金博士シリーズ・4——

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>